223　茶臼山城跡（ちゃうすやま）　小田郡矢掛町東三成・矢掛　地図 25 右

立地　現在の矢掛町市街地の東側に隣接し、小田川北岸の平野を分断するように南北に横たわる独立丘陵、茶臼山（標高約 115 m）の山頂と、その南側に延びる尾根筋一帯に広く曲輪を展開する城郭である。城からは、東・西・南に広く展望が開け、周囲の平野や南麓の小田川、山陽道なども見渡すことができる。

概要　城域は全長約 540 mにわたって多数の曲輪が連なり、備中地域では高梁市の備中松山城に次ぐ規模を誇る城郭である。山頂部に主郭（「本丸」）を置き、そこから南東に延びる尾根上に「太鼓丸」、主郭から南側に派生する尾根上に「鎮守丸」「二の丸」「爺ヶ段」「三の丸」と呼ばれる曲輪群が展開する。丘陵の南東麓には、山裾に接して水堀の跡が現在も残る。なお国土地理院の空中写真によれば、二の丸・三の丸一帯は戦後に畑として開墾されていたようであり、さらに 1985 年以降には「茶臼山文化の丘」として整備され、道路や駐車場の造成によって城内の遺構は改変を受けている。現地で確認できる平坦面や斜路の中には、本来の形状かどうか判断に迷うものも含まれている。

山頂の主郭は、城域の北端近くに位置しており、全長約 40 m、幅約 25 mを測る不整な長方形を呈し、郭面には現在テレビ塔が立っている。郭面の周囲は高さ 5 ～ 7 mの切岸であり、下方を帯曲輪が取り巻いている。曲輪の西辺及び南辺の切岸上端には自然石の角礫を用いた石垣が築かれているが、城郭に伴うものかどうか判然としない。主郭北側の尾根筋は土橋を伴う落差約 5 mの堀切で遮断され、その外側にも落差約 4 mの切岸が確認できる。主郭の北西側には、石垣を伴う小規模な平坦面と 1 本の竪堀が認められる。

主郭の南東に延びる尾根筋が「太鼓丸」と呼ばれる曲輪群である。現在は舗装道路によって寸断されており、道路より上方に 2 面、直下には 1 面の曲輪が現存し、さらに尾根の下方には全長約 60 m の大規模な不整台形の曲輪がある。さらに尾根筋の先端付近や、南西側の谷筋にも多数の平坦面が現存するが、ほとんどが後世の畑の段と考えられる。

「鎮守丸」と呼ばれる曲輪は、主郭から南側に延びる尾根上に置かれ、城域全体のほぼ中央に位置している。尾根筋に沿って南北に細長く延び、さらに東西に派生する尾根も含めて、南北約 120 m、東西約 100 mの不整な十字形を呈する城内最大規模の曲輪である。曲輪の北端には、主郭方面から続く舗装道路が取り付いて郭面が大きく削平され、西端の突出部は道路からつながる駐車場となり地

写真 89　遠景（東から）

写真 90　東麓の堀池（北東から）

形改変が著しい。郭面の頂部は「経王大菩薩」の社地であり、社殿西側には高さ 0.5 mほどの高まり、北側には直径約２mの石組みの井戸が現存するが、城の遺構かどうか不明である。

「鎮守丸」の南側では尾根が二つに分岐し、東側の尾根が「二の丸」、西側の尾根が「三の丸」、両者の間が「爺ヶ段」と呼ばれる曲輪群にあたる。

「二の丸」は、鎮守丸の南端から南に延び、さらに東や南西に分岐する尾根筋や斜面に展開する曲輪群である。頂部は、鎮守丸から南側に続く尾根上に立地する、全長約 45 m、幅約 20 mの不整楕円形を呈する曲輪である。ここから南側への展望は主郭を凌いでおり、平野部を監視する重要な機能

第 193 図　茶臼山城跡縄張り図（1/4,000）

を担ったと考えられる。現状では鎮守丸側から郭面に登る斜路が付設されているが、これは公園整備の一環として造成されたものである。西側から南西側の下方には大小の曲輪が数面設けられている。南東側下方には、高さ７～８ｍの切岸を挟んで３面の曲輪が連なる。これら南東側の曲輪群は最大幅５ｍほどの斜路によって連結されているが、本来の形状かどうかは不明である。また、上から２面目と３面目の曲輪の南端付近から「三の丸」の方向に向かって、犬走り状の細長い平坦面が３面続いているが、これらも城郭遺構かどうかはっきりしない。

「爺ヶ段」は、二の丸と三の丸との間の谷筋に分布する曲輪群であり、５段の曲輪からなる。曲輪列の北西側には、「鎮守丸」の南端から「三の丸」へつながる通路が通っているが、「二の丸」と同様に、本来の形状かどうか不明である。上位３段分は、三角形に近い形状の曲輪を、２～３ｍの切岸を伴いながら全体として弧状に湾曲した配置である。最下段の曲輪は、全長約 40 ｍ、幅約 30 ｍの比較的大規模な平坦面をなし、郭面の北端に石組みの井戸が１基現存している。

第 194 図　茶臼山城跡北半部縄張り図（1/2,000）

「三の丸」は、城域南西部に位置する曲輪群である。最上段の曲輪は、「爺ヶ段」の最下段の曲輪の西隣に位置する、西に張り出す半円形の平坦面であり、そこから南へ延びる尾根上に平坦面が連なっている。尾根の先端付近は現在も段々畑として耕作されており、曲輪と畑の段との区別が難しい部分もある。図示した平坦面のうち、下から 4 面目までは法面に小規模な石垣を伴い、現在は山林であるが、畑として再利用された名残と考えられる。三の丸の曲輪群の西側下方には、山麓から二の丸方面へと続く山道が通るが、城の犬走りなどをある程度再利用した可能性も考えられる。

第 195 図　茶臼山城跡南半部縄張り図（1/2,000）

城の南東麓には現在も水堀の跡が残り、想定される全長は約 600 m、幅は 20 m前後を測る。この水堀は河川の流路を利用したと考えられるが、一部に意図的に屈曲させた箇所も認められる。北西端のみが現在も「堀池」という名前の池として残り、それ以外の箇所は周辺よりやや低い水田となっている。『矢掛町史』によると、水堀内側に茶屋敷・郭内屋敷・大手（桝形）、水堀の西端には船屋敷が所在するとされ、現地表では視認できないものの各種施設の存在は十分考えられる。一方、城域の南西側は小田川自体が急峻な地形と相まって、強固な守りを形成したと想定できる。

茶臼山城跡では、1984・85 年度に公園整備と道路建設に伴う発掘調査が行われている。調査の結果、太鼓丸では幅約 4 m、深さ 0.7 mの堀切が検出され、亀山焼の擂鉢・甕・土鍋、小皿、青磁、鉄釘などが出土した。鎮守丸では柱穴周辺から嘉祐元宝 1 点、爺ヶ段では柱穴・礎石・石列・版築面などが検出され、備前焼の擂鉢・大甕などが出土した。

茶臼山城跡は存続期間が短く、またその間に大幅な改修も受けていないことから、戦国末期における城郭の形態を残す貴重な事例といえる。

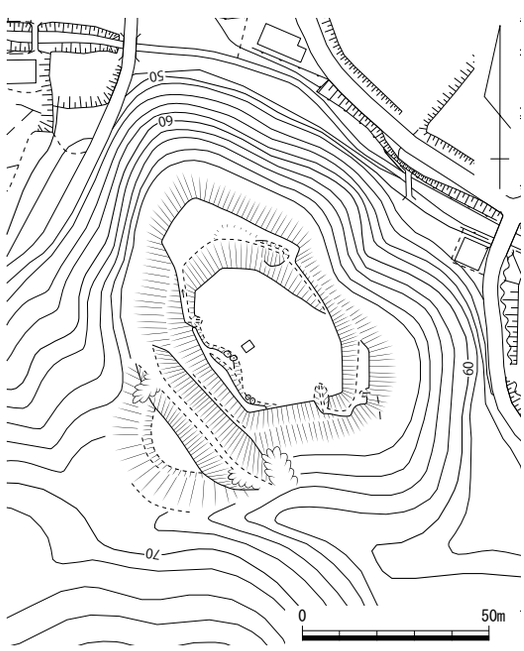
文献・伝承　天正 11（1583）年、猿掛城主の毛利元清は茶臼山城へと居城を移した。ただし茶臼山城は元清の築城ではなく、元清の部将であった江木半四郎がいた城に拡張工事を加えたものともいわれる。この江木半四郎が居住した場所と伝えられるのが、現在「爺ヶ段」と呼ばれる曲輪である。同 13（1585）年、元清は毛利輝元の命令で二男の宮松丸とともに安芸の桜尾城に移り、茶臼山城には城代を置いて守らせた。同 15（1587）年、豊臣秀吉は九州出陣の途上で茶臼山城に立ち寄ったとされる。慶長 2（1597）年 7 月に元清は病没し、茶臼山城及び領地の大部分は毛利輝元の直轄地となったが、同 5（1600）年に関ヶ原の戦いで毛利氏は敗北し、茶臼山城も廃城となった。　（岡本）

226　原砦跡　　小田郡矢掛町横谷　　地図 26 左

立地　小田川に向けて北へ流れる大渡川を眼下にする山塊端部の小丘陵に立地する。

概要　頂部に、南北約 40 m、東西約 30 mの曲輪を造成している。南西縁には高さ最大で約 1.5 mの土塁を配する。土塁の形状は、後世の祠の設置等により若干改変されている可能性がある。主郭の北と東、それぞれ約 6 mと 3.5 m下に腰曲輪を設け、それらを繋ぐ通路が良く残る。東の曲輪への通路は、主郭の端を溝状に掘削し虎口とし、南→東→北へと二度屈曲する。また、北の曲輪への西側の通路も、主郭端部を溝状に掘削し、一度屈曲する。山塊に繋がる主郭の南西側斜面には大きな堀切を掘削している。深さは約 5 mで、堀底と主郭の土塁上面との比高は約 8 mを測る。

文献・伝承　玉島から富の峠を越えて横谷に抜ける街道に位置し、『岡山県遺跡地図　第四分冊　井笠編』では、猿懸城の砦と伝えられているとする。（物部）



第 196 図　原砦跡縄張り図（1/2,000）